

# 藤壺と十字架

榎園 久

一

〔藤壺〕「院の御遺言おとこごえんにかなひて、うちの御うしろみ仕うまつり給ふこと、年ごろ思ひ知り侍ること多かれど、何に付けてかは、その心よせ異なるさまをも漏らし聞えむ、とのみ、のどかに思ひ侍りけるを、今なむ、あはれに口惜しく」と、ほのかに宣はするも、ほのく／＼聞ゆるに、御いらへも聞えやり給はず、泣き給ふさまいとみじ。

「などかうしも心弱きさまに」と、人目を思し返せど、いにしへよりの御ありさまを、おほかたの世につけても、あたらしく惜しき人の御さまを、心になふわざならねば、かけとゞめ聞えむかたなく、いふかひなく思さるゝこと限りなし。  
〔源氏〕「はか／＼しからぬ身ながらも、昔より、御うしろみ仕うまつるべきことを、心のいたる限り、おろかならず思ひ給ふるに、おほきおとゞのかくれ給ひぬるをだに、世の中心あわたゞしく思ふ給へらるゝに、またかくおはしませば、よろづに心乱れ侍りて、世に侍らむことも残りなきこと、ちなむし侍る」と聞え給ふ程に、ともしびなどの消え入るやうに

てはて給ひぬれば、いふかひなく悲しきことを思し嘆く

〔角川文庫「源氏物語」四卷三三頁—三四頁。以下、「源氏物語」の引用は、同文庫本による。〕

桐壺帝后妃・藤壺の臨終を述べるこの件において、「源氏物語」の語りは、その始めの一つの季節を終える趣がある。次の、秋山の叙述は、わたくしのこの考察を、支援するものと思われる。

藤壺の死は、その意味で源氏の生涯の！とりもおさず源氏物語の世界の、一つの転換を象徴する事件であつたといえよう。<sup>(1)</sup>

かつて、角川文庫「源氏物語」(第一卷「さるまゝ」には、まんなを走り書きて、さるまじきどちの女ぶみに、なかばすぎて書きすゝめたる、あなうたて、この人のたをやかならましかば、と見えたり。こゝちにはさしも思はざらめど、おのづから、こはくしき声に読みなされなどしつゝ、ことさらびたり。上臈の中にも多かることぞかし)「帯木」第二卷「まして、今は浅茅あさげわくる人もあと絶えたるに」「未摘花」相当の現代語訳欠文)を精読した。所感を著語(メモ)した。その中で、「薄雲」の巻、「五、二条院の明石の姫君」の項(四卷二五頁)の余白に、「一部の二部」の著語がある。現行の一部を等質と見るには抵抗を感じたものとみ

える。

ハルオ・シラネ氏は、次のように述べる。

中世の伝説は、紫式部が中官彰子の求めに応じて石山寺を訪れ、仲秋の名月のもと琵琶湖のほうを見やるうちに、「源氏物語」を「須磨」、「明石」の巻から書き始めたと伝えている。この話は、鎌倉時代には、既に読者がこれらの二巻が「源氏物語」における新たな出発点、少なくとも新たな局面の到来を告げていることに気づいていたことを物語るのである。

又、秋山虔氏は、

「明石」巻に次ぐ「濯標」巻は、物語の世界の進行に明確な期を画するものである。これまでの光源氏の人生の決算と同時に新たな人生の出発点がここに語られる。また光源氏の人間像の顕著な変貌がこの巻にはじまるともいえよう。

と、一部の中での変容の存在点を示しておられる。

更に、前の秋山虔氏の主張と関連して、岡一男氏は、五十嵐力氏の三部説、池田龜鑑氏の三部説の次に、

主人公光源氏の精神発展史からいうと、第一部を「桐壺」から「明石」までとし、光源氏の出生から青年時代までを叙し、幾多の試練を経つつ、あくまで現実的なるものを追求してゆく物語、第二部は「濯標」から「藤末葉」までで、光源氏の中年時代六条院の栄花を絶頂とする彼の若き日の現実的なるものへの理想の達成を描き、第三部は「若菜」から「幻」までで、光源氏の晩年時代、現世に出現した浄土かとみられた六条院の栄花が内部から崩壊してゆき、彼がひとり寂しく嵯

峨院に出家しようとするまでを描く、すなわち、現実的なものから宗教的世界への転進が主題となつてゐる。第四部は「匂宮」から「夢浮橋」までで、薫の青年時代の宇治の姫君たちとの悲恋を描くが、自分の出生の疑惑から宗教的世界に志向した彼が思わぬ恋の山に踏みまよつて、その愛人の出家の真意さえ悟りえない俗人になりおさせたことでこの物語は終つてゐる。

と、述べておられる。現行の一部を分けて、「濯標」の巻を第二部の始まりとされる点が注目される。論を藤壺と源氏に戻そう。

## 二

まず、藤壺の原型を示す、源氏の生母の後宮生活を詳しく述べておこう。又、藤壺が、源氏に一女性として、愛の対象に思われ始めたのは、いつの日からか。母と藤壺を結ぶ。

いづれのおほん時にか、女御更衣あまた侍ひ給ひけるなかに、いとやむごとなききは、はあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。

はじめよりわれはと思ひあがり給へる御かた、めざましきものにおとしめそねみ給ふ。同じほど、それより下腐の更衣たちは、まして安からず、あさゆふの宮仕へにつけても、人の心をのみ動かし、恨みを負ふつもりにやありけむ、いとあつしくなりゆき、もの心ほそげに里がちなるを、いよ／＼あかずあはれなるものに思ほして、人のそしりをもえはさか

らせ給はず、世のためしにもなりぬべき御もてなしなり。かんだちめ、うへ人なども、あいなく目をそばめつゝいとまばゆき人の御おぼえなり。もろこしにも、かゝる事の起こりにこそ、世も乱れ、あしかりけれ、と、やうくあめのしたにもあじきなう、人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃のためしも、ひきいでつべくなりゆくに、いとほしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへのたぐひなきを頼みにてまじらひ給ふ（二卷二五頁—二六頁。傍点は引用者。以下同じ）。

桐壺の更衣は、たまらない思いがすることが多いけれども、帝の恐れ多い愛情の、またとないほどののを、頼みにして、後宮生活が続いていることが分かる。帝の桐壺の更衣への寵愛ぶりは、女御や更衣だけでなく、上達部や殿上人、その他の者までが横目でにらむありさまであったのだ。

その中で、  
さきの世にも御ちぎりや深かりけむ、世になく清らなる玉の  
をのこ御子さへ生まれ給ひぬ  
（二卷二六頁）。

源氏は、ここにみる桐壺の更衣を母として、世に現れたのである。帝は、兄の第一王子に対しては、一通りの形ばかりの寵愛で、この若宮（後の源氏）を秘蔵に思い、この上もなく大切にす。源氏は、その母と同様に、帝から深く愛しを受けけることになる。

源氏が生まれてきてからは、  
御つぼねはきりつぼなり。あまたの御かたぐゝを過ぎさせ給  
ひて、ひまなき御まへ渡りに、人の御こゝろを尽くし給ふも、  
げにことわりと見えたり  
（二卷二七頁）。

このように、物語の語り手も認める帝の更衣への寵愛ぶりであった。人々は収まらない。

まうのぼり給ふにも、あまりうちしきる折りくは、打ち橋渡殿のこゝかしこの道に、あやしきわざをしつゝ、御送り迎への人のきぬの裾たへがたく、まさなき事もあり。又ある時には、えさらぬ馬道の戸をさしこめ、こなたかなた心をあはせて、はしたなめわづらはせ給ふ時多かり。事にふれて、かず知らず苦しき事のみまされば、いといたう思ひわびたるを、いとゞあはれと御覧じて、後涼殿にもとより侍ひ給ふ更衣の曹司を、ほかに移させ給ひて、うへつぼねに賜はす。そのと恨み、ましてやらむかたなし（二卷二七頁—二八頁）。

それにつけても一般に非難ばかりが多い中、この王子がだんだん成長していく器量・性質が、またとないまで見事に見えるので、誰も憎みとおすことはできないのである。

源氏のこの生母のひとつとなりは、

いとにほやかに美しげなる人の、いたう面やせて、いとあはれと物を思ひしみながら、ことに出でて聞えやらず、あるかなきかに消え入りつゝ物し給ふを、御覧するに、きしかた行く末おぼしめされず、よろづの事を泣くく契り宣はすれど、御いらへもえ聞え給はず、まみなどいともたゆげにて、いとどなよなよと、われかの気色にて臥したれば、いかさまにと、おほしまどはる  
（二卷二八頁—二九頁）

人であり、世間の情理が分かる人は、態度・容貌などが立派で、気だてがおだやかで圭角がなく、憎めない人だったことなどを今

になつて思ひ出す。帝の見苦しいまでの愛情のせいで、そつげもなく嫉んだのである。性格は可憐で、情がこまやかだった。かくべつ巧みに琴を奏し、ふと耳に入れる歌の句も人の及ばぬものであつたのである。

以上において見てきたこの最上の母親の形代として入内したのが、先帝の四の宮・藤壺であつた。

げに御かたちありさま、あやしきまでぞおぼえ給へる。これは、人の御きはまさりて、思ひなしめでたく、人もえおとしめ聞え給はねば、うけばりてあかぬ事なし。かれは、人の許し聞えざりしに、御こゝろざしあやにくなりしぞかし

(一卷四三頁)。

源氏は、母御息所の顔は少しも記憶にないが、本当にそっくりだと典侍という藤壺を、子供心になつかしく思い、始終側にいたく、また近づきたいものと思う。

元服した源氏は、左大臣の四の君と結婚する。元服してからは、帝は、前のように御簾の内に、源氏を入れることはない。藤壺は、遠く高い所へと昇つて行つたのである。

源氏は、

心のうちには、ただ藤壺の御ありさまを、たぐひなしと思ひ聞えて、「さやうならむ人をこそ見ぬ。似る人なくもおはしけるかな(下略)」

(一卷四八頁)

と、誠に苦しいまでに胸をいためている。

あのような方を妻としたいものだ。元服し、結婚もした源氏にとって、雲上の女・藤壺は、最上の母性から、理想の妻へと、源

氏の心の内に、恋の対象となつてゐる実情が、はつきりと知られる。ここには、すでに、藤壺と源氏の将来の発端が認められると言える。

### 三

光る源氏、名のみことぐしう、言ひ消たれ給ふとが多かるに、いとゞ、かゝるすきごとどもを末の世にも聞き伝へて、かるびたる名をや流さむと、しのび給ひける隠ろへ事をさへへ、語り伝へけむ人のものいひさがなさま。さるは、いといたく世をはゞかり、まめだち給ひけるほど、なよびかにかしき事はなくて、交野の少将には笑はれ給ひけむかし。

まだ中将などにもし給ひし時は、うちののみさぶらひうし給ひて、おほいとのはたえぐまかで給ふ。しのぶの乱れやと疑ひ聞ゆる事もありしかど、さしもあだめき目なれたるうちつけのすきぐしさなどは、好ましからぬ御本性にて、まれには、あながちにひきたがへ、心づくしなる事を、御心におぼしとどむる癖なむあやにくにて、さるまじき御ふまひもうちまじりける。

(一卷五〇頁)。

藤壺と源氏の、初めのもののまぎれは、かなり早い時期にあつたと思われる。『源氏物語』の序章とも言える「兩夜の品定め」の中で、

この御ためには、上かみが上かみを選り出でて、猶あくまじく見え給ふ

(一卷五六頁)。

とある源氏である。

左馬の頭の終論に近い件に、

君は、人ひとりの御ありさまを、心のうちに思ひ続け給ふ。

「これに、たらず、又さしすぎたる事なくものし給ひけるかな」と、ありがたきにも、いと胸ふたがる（一卷七七頁）。

又、兩夜の品定めが、結論の出ぬまま終つたあと、源氏は、中川に方たがえをする。

うちさゝめき言ふ事どもを聞き給へば、我が御うへなるべし。

「いといたうまめだちて、まだきにやむごとなきよすが、定まり給へるこそ、さうぐしかめれ。されど、さるべきくまには、よくこそ隠れありき給ふなれ」など言ふにも、おぼす事のみ心にかゝり給へば、まづ胸つぶれて、かやうのついでにも、人の言ひもらさむを、聞きつけたらむ時、など、おぼえ給ふ。ことなる事なければ、聞きさし給ひつ

（一卷七九頁―八〇頁）。

源氏は、藤壺とのものまぎれを秘めていると考えてよいだろう。さて、藤壺と源氏との関係について、次の記述がある。

藤壺は父帝の妃、はるかなる彼方の存在です。しかし理想の女性、わが心の灯として、源氏の恋慕は深くなるばかりです。

苦しいまでの彼は、藤壺に代わる女性を探したい、この苦悩から逃れたいと思うのです。そこで彼の女性探訪がはじまります。

これは、しばしば見受けられる学説である。しかしながら、いかに藤壺を慕っているとはいえ、源氏の青春の彷徨を、藤壺への

愛の渴望にのみ一切結びつけて考える説には、従えない。藤壺への恋慕を心の底に秘めながら、源氏は、一人の若者として、空蟬・夕顔・軒端の萩・源典侍……と愛の彷徨をつづける。多方面ではあるが、若者の青春時代における心情としては、この方が自然の姿として理解され易い。事実、源氏の愛の形は、このようなものだったのである。源氏は、藤壺との密事を持ちながらも、未摘花を頭の中將と競いあつている。ここで留意すべき事は、源氏の恋は、若者特有の異性への激しい執着であると同時に、源氏の場合が、普通の若者と異なっている点は、藤壺という雲上の女性と関係がすでにある事である。又、形代も欲している。紫の上を自分のもとへと引き込んだことは、他の恋人と別格に藤壺を愛している為である。異性への並はずれた関心と、又、時を等しくして、激しい恋慕もやす藤壺への愛、それが叶わぬと、そのなぐさめとなるものを欲していることが、源氏の青春時代の心情の特徴であつたと考えられる。

#### 四

藤壺は、源氏がかかわり合いを持った女性達の中で、表に出、真に在る、最愛の女性である。

藤壺は三十七歳でその生涯を閉じます。源氏は、その臨終の場に侍しています。その死を作者は、「ともし火の消えるように」と表現しています。短い言葉ながら、源氏の藤壺とのかかわりの凡てを、表わして余りある表現です。

死を前にした、僅かな時間ではあるけれど、藤壺と源氏の愛の燃焼、その喜びを（マツル）表わしても居りますし、源氏の心の灯、藤壺は源氏の愛の法灯でもあったわけです。源氏にひそやかな愛を抱いていた藤壺ではありませんが、それほど女性をも、一方的な行動をとった源氏だったのです。永遠の女性として、思慕の限りを傾けた藤壺の枕辺に待す源氏と、命盡さんとする藤壺との二人の愛は、死の数秒前にやとと明るく燃えることが出来たのでした。藤壺は死んだ。しかし藤壺はなお死なずに生き続けます。源氏の胸に。

夜居の僧都の密奏の件の後で、主上が秘密を知っているのなら、故藤壺の宮のためにも気の毒だし、また主上がこのように思い悩んでいるのを、目前にするのも恐れ多いと思つた源氏は、王命婦に糺すが、

「さらに。かけても聞こし召さむことを、いみじき事に思し召して、かつは罪うることにや、と、上の御ためをなほ思し召し嘆きたりし」  
(四巻四一頁)

と、いうのを聞くにも、源氏は、故宮が、  
ひとかたならず心深くおはせし御ありさまなど、つきもせず、恋ひ聞え給ふ。  
(四巻四一頁)

後の女三の宮の降下の決定的なきっかけが、藤壺への愛によるという事実を述べるまでもなく、藤壺を源氏は、その死後も限りなく思慕したことが分かる。

藤壺の在世中に、源氏は、虐病（わらはやみ）を患つた際、北山で、後の紫の上を発見することになって目が止まるのも、無限

の愛を寄せる藤壺によく似ているので、目が離せないと気づくともう涙がこぼれる。

このことによつても源氏が、様々な恋愛関係の中にありながらも、その生涯で一番愛した女性は藤壺であつたことが分かる。

藤壺との二度目の密事のあと、悲しくてたまらない様子の藤壺を前に、

なつかしうらうたげに、さりとてうちとけず、心深う恥づかしげなる御もてなしなどの、なほ人に似させ給はぬを、などかなのめなる事だにうちまじり給はざりけむ（二巻一七三頁）  
と、源氏は、恨めしくさえ思うのである。

（源氏）「見ても又逢ふ夜まれなる夢の中（ま）にやがて紛るゝ  
我身ともがな」  
と、むせかへり給ふ様も、さすがにいみじければ、

（藤壺）「世語りに人や伝へむ（た）類なくうき身を醒めぬ夢  
になしても」  
おほし乱れたる様も、いと道理（ごちり）にかたじけなし

藤壺は、やはり辛い悲しいわが身であつた悲嘆にくれ、病氣も進み、参内する気にもなれないのである。  
(二巻一七四頁)

懐妊した藤壺を、帝は、ひとしおいとしさも限りなく思い、雲上から地上におりている藤壺に勅使も間なく暇なくくるが、それを何やら恐ろしく十字架を背負つた藤壺は煩悶の絶え間もない。

藤壺も、亦、源氏を愛していたのである。  
(人々)「今日はまた殊（ま）にも見え給ふかな。ねび給ふまゝに、

ゆゝしきまでなりまさり給ふ御有様かな」と、人々めで聞ゆるを、宮、几帳のひまより、ほの見給ふにつけても、思ほすことしげかりけり、  
(二巻五八頁―五九頁)

藤壺の源氏との愛は、帝の后との性愛、母の座にいる人との性愛という、許されることのない愛ではある。しかし、しっかりと一つの真実のかよい合う愛であったと思われる。皇子誕生に及んで、藤壺は、何ごとにも、心休まる暇なく、落ち着いた空もない。ここに又、新しく、十字架を背負った藤壺の煩悶が深まる。

宮は、わりなくかたはらいたきに、汗も流れてぞおはしける  
(二巻六二頁)。

この若君を、東宮にと思う桐壺帝は、後見人のいない今、せめて皇子の母親・藤壺を、確固とした地位にしようと考え。

(源氏)「つきもせぬ心のやみにくるゝかな雲ゐ人を見るにつけても」  
(二巻七六頁)

雲上の藤壺に、地上の源氏は、感慨無量である。

藤壺は、ほかに頼りにする人がいないので、何事も源氏を頼りにしているが、源氏には、ややもすれば、はつとさせられることが多く、桐壺院は少しも気配を知っていないのだと思うだけでも恐ろしい限りなのに、

「今さらに、またさる事の聞えありて、わが身はさるものにて、東宮の御ために、必ずよからぬ事出できなむ」と、おほすに、いと恐ろしければ、御折りをさへせさせて、「このことと思ひやませ奉らむ」と、おほし至らぬ事なくのがれ給ふ  
(下略)  
(二巻一五一頁)

藤壺であった。

密通が露頭すれば、大将も皇后も東宮も、その地位を失うからである。

その密通の事実は、藤壺の終生において、外に表れることはなかった。藤壺の、源氏を在俗のまま、冷泉院の後見人とし、同時にまた源氏の癖をさげ、何よりも、ものまざれの世に現れる事がないようにとの十字架を背負ったその努力の姿は、叡智といえるだろう。

そして、今の藤壺は、源氏に過敏でさえある。

山づとに持たせ給へりし紅葉もみぢおまへのに御覧じくらぶれば、ことに染めましける露の心も見過ぐし難う、おほつかなさも人わろきまでおほえ給へば、ただおほ方にて宮にまゐらせ給ふ  
(二巻一六二頁)。

それに例のごとく、小さな紙がつけてあるのが目にとまると、藤壺は、顔の色も変わって、

「なほかかる心の、絶え給はぬこそいとうとましかれ。あたら思ひやり深うものし給ふ人の、ゆくりなく、かうやうなる事折々ませ給ふを、人もあやしと見るらむかし」と心づきなく思われて(下略)  
(二巻一六二頁)。

このような状況下、藤壺の選択した事態取捨の具体的な手段は、自分自身の入道であった。藤壺は、十字架を背負っているのだ。ここに關して、後藤祥子氏は次のように述べる。

桐壺帝周忌法要に続く法華八講の果ての日、藤壺中宮は突然出家の意志を公にし、時を措かず受戒落飾あてがいした。夫帝の死

を哀悼する後の貞節のあらわれとして、衆人がこれを評価したことは、出家の記述に続く、「故院のみこたちは、昔の御ありさまを思し出づるに、いとどあはれに悲しう思されて、みなとぶらひきこえまふ」(賢木)の叙述を待つまでもない。桐壺帝皇妃が弘徽殿太后を筆頭に、その四十九日まで忌みを共にした女御御息所たちを合わせて少なからぬ数であったことは、皇子女たちの員数からも想像されるが、この段階で出家を断行したのは中宮一人であり、その殉情ぶりは、皇妃中における藤壺中宮の位置を改めて人々に印象づけたに違いない。桐壺帝退位以来、「今は、まして隙なう、ただ人のやうにて添ひおはし」「立ち並ぶ人なう心やすげ」(葵)と語られた、帝と中宮の稀有な後宮関係からすれば、その死に殉じて藤壺が落飾することは、しかるべき結末と納得される。にもかかわらず、出家の意図が、決して帝への殉情一筋という類のものでなかったこともまた、物語の明らかにするところである。(中略)藤壺に出家を思立させるに至った道筋は、道徳的というよりは厭世的、厭世的というよりは保身的身の発心へという、きわめて曲折した思考が辿られており、源氏の執心と弘徽殿太后の敵愾心との板挟みとなった中宮が、危機を回避するための一策として、出家を次意したのだとの読みが可能である。

右の見解が、藤壺の全き心情を描き終っていないとすれば、次の記述で補うことが可能であろう。

上皇の一周忌をすませたあと、藤壺は、尼になりました。それは桐壺帝への懺悔、源氏の愛への永遠の訣別であり、皇太子のしあわせを、仏に祈念する母心の切実な願いでもありました。現世での大罪の幾分かをつぐなつて、ほつと肩の軽くなる藤壺でした。藤壺と源氏のたえざる自己抑制は、この事件をあれほどきびしい反源氏派にかぎつけられる事もなく、ここまで来たのでした。

須磨隱遁のあと、源氏が帰京を許されて、「落標」で、御代がわり、政權交替の運びになつて、藤壺は、元服した東宮が、まきり源氏の顔をもう一つ作つたように見えると世間の人が言う中、言いようもない苦勞をするが、今は、藤壺は、それまでの十字架を背負つた世間への配慮から、楽になつていく。

藤壺は、冷泉帝のため、齋宮の入内を源氏とはかる。源氏の、何から何まで気のつかないことはなく、政治上の補佐は言うまでもなく、帝のことについても、それへの細心の配慮が、身にしみて嬉しく、頼もしく見える中、藤壺自身は、病弱で参内などしても、気づかいなく帝の側にいることは難しいので、少し年上のお側付きする世話役は是非必要な事であつたからである。

源氏帰京後の、右に見る、にわか政治的人間となつた藤壺について、今井源衛氏は、「女傑の風貌を呈する」と評する。

そのころの天変地異の原因の何かを、源氏のみが気づく中、それを知らぬことなく、藤壺は、その生涯を閉じる。王朝空間を、愛



と叡智に生きた藤壺の十字架を背負ったひたすらな人生は、一人の人間のある種のたくましささえ印象付ける生き様であったと言つてよいだろう。源氏との密事は、藤壺の生涯を終えるまでもついに表に出ることはなかったのである。しかしながら、藤壺と源氏の秘め事は、後に、冷泉帝と源氏に、大きなむくいをもたらすことになる。隠蔽は成功を取めれば取めるほど、その罪はまた大きくなつたと言える。背徳は隠蔽されたが、背徳の事実とそれにつながる当然の罪と罰は、決して消し去ることはありえなかつたのである。

## 五

当時、自分の父を知らないことは、罪と思われていたようである。これに関連して、山口剛氏に、次の記述がある。

みづからの罪とは何ぞ。わが實の父の存在を知らざる事である。(中略)當時天變頻に起り世の中静でないのは、天が冷泉院の知らざるを罪したのである。

別の所で、円地文字氏も、実の親と知つた親を親扱い出来ない罪について、次のように述べている。

そうして、桐壺帝の眼を盗んで源氏が藤壺と通じたことは、さして問題にならず、それよりも、帝の心に一番強く、罪深く、思われるのは、実の父を父と呼べず、自分の臣下として、わが前にひれ伏させている事実なのである。(傍点は円地氏)。

藤壺は、それ相応の生涯を送つた。

藤壺の宮が、光源氏は、密通という不道徳な行為を犯していても、その行為に至る経緯においても、犯しからの煩悶懊悩においても、人のこころの底をゆする「あはれ」を失つていない点で、「よき人」の条件を傷つけていない。

ここにおいて、われわれは、『源氏物語』という文学形象が、いかような意味合いを有する作品であつたかという問題を突き付けられる思いをさせられる。藤壺の死後、不義の子冷泉帝は悩み、又、藤壺への思いのつきない源氏は、後に苦い経験をかみしめなければならなかつた。円地氏は、又、次のようにも述べている。

すべて、単に女性の手になつた、というだけの意味でございまして、「源氏物語」が「女の文学」であるということではありません。一面ではたしかに、女の願望、女の情感、女の理想で貫かれてはおりますけれども、全体として見れば、男と女の性をはるかに超越した人間そのものが描かれていると思います。

愛と叡智に生きた藤壺の十字架を背負ったひたすらな人生は、女の性を越えて、何が彼女にそのような人生を余儀なくさせたか、その人生を方向づけたものは、人間のどこに根ざしているか、という観点から、人間存在一般の問題として、新しく、われわれの前に迫ってくる。背徳者の愛と叡智の限界を知つて、人間の本質を改めて問い直すことが必要になってくるであろう。円地氏の右の見解に至つて、われわれは、人間の中心的独自の特徴とは何かという普通のテーマに迫つた、藤壺と源氏を核とする『源氏物語』の、文学形象としての偉大さ、質の高さを、今更のように、強く

認識させられる。「源氏物語」の表現世界は、罪を生む女と、碎花の本性を持つ男を描く事によって、人間の業がいかに深かろうとも、両性にとつて、即ち人間にとつて、真理の中を歩むことが、いかに大切であるかということ、文学的に巧みに教誨しているものと理解すべきであろう。

注

- (1) 秋山 虔『源氏物語』(昭三五・八)四三九頁。
- (2) ハルオ・シラネ『夢の浮橋』(一九九二・二)一一六頁。
- (3) 秋山 虔『源氏物語』(一九七三・三)五三頁。
- (4) 岡 一男『國文學解釋と鑑賞』七月特集増大号『源氏物語』のテーマ(昭三六・十)五三頁。
- (5) 村山リウ『私の源氏物語』(昭五五・二)六二頁。
- (6) 村山リウ『私の源氏物語』(昭五五・二)六六頁―六七頁。
- (7) 後藤祥子『源氏物語の史的空間』(一九九三・五)三六頁―三七頁。
- (8) 村山リウ『私の源氏物語』(昭五五・二)七七頁。
- (9) 今井源衛『國文學解釋と鑑賞』秋の臨時増刊『源氏物語 登場人物の性格と役割』(昭三四・十)三八頁。
- (10) 山口 剛『源氏物語』下 増補国語国文学研究史大成4 (昭五二・八)二〇二頁。
- (11) 円地文字『源氏物語私見』(昭五二・一)九〇頁。
- (12) 円地文字『源氏物語私見』(昭五二・一)一〇七頁。

(13) 円地文字『源氏物語私見』(昭五二・一)一九七頁。

(二〇〇〇年三月で定年退職しました。)